

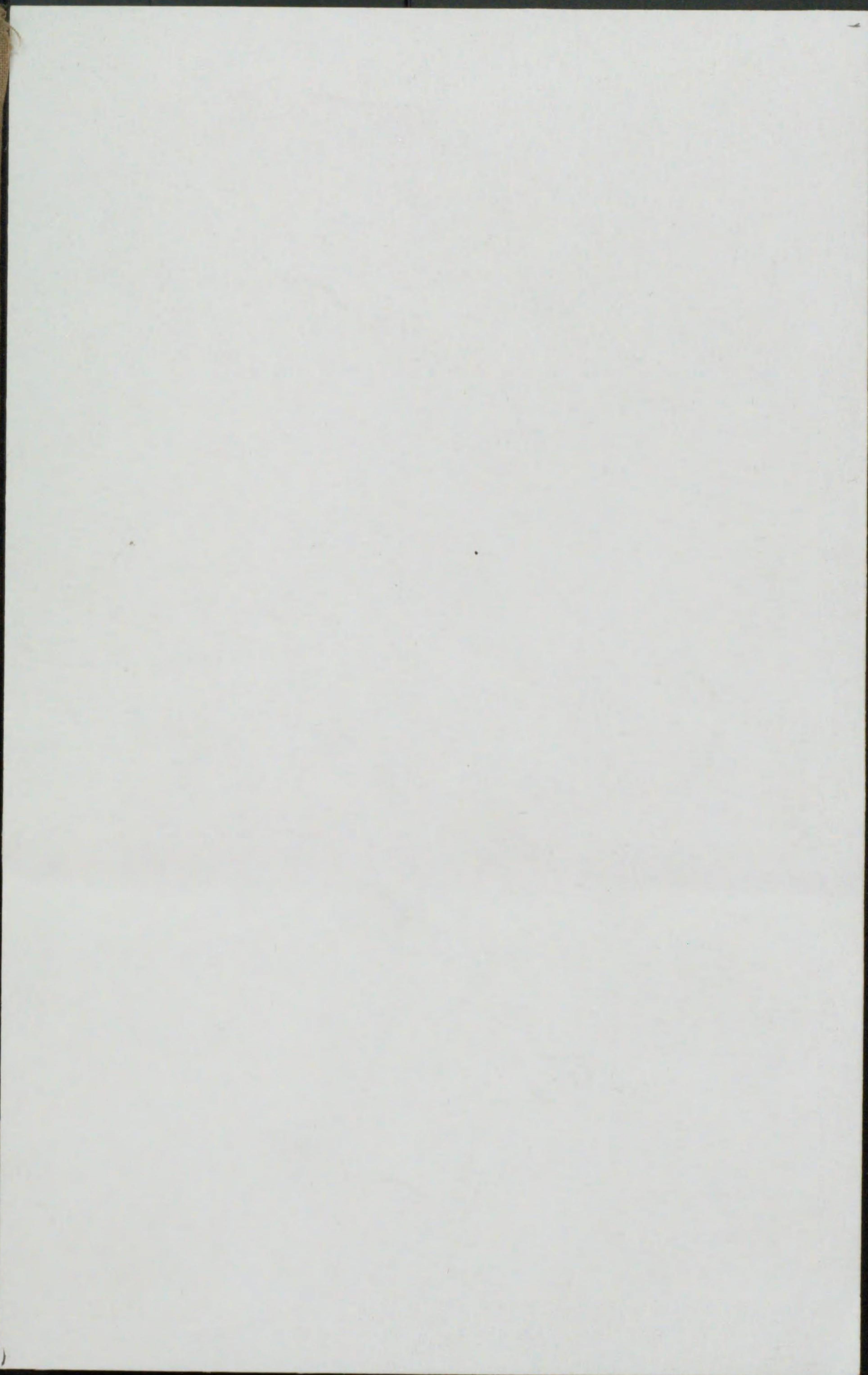
568-325



1200501515887

568
25

290







古今雅集

清猶本

上



例言

本書は、尊經閣叢刊戊辰歲刊行の一として、藤原清輔自筆の本と傳へらるる古今和歌集二冊を活字に印したるものなり。これが原本は前田侯爵家に秘藏せらる。

清輔の書寫にかかる古今和歌集を轉寫せし本にして、現存するもの數種あり。皆相互に多少の異同を存す。これ清輔が年をかへて度々書寫せし爲にして、その中少くとも永治二年、仁平四年、保元二年の三箇度書寫せし事につきては確證あり。前田家所藏の原本は、縦八寸強、横四寸九分、頗る古雅なる鳥の子胡蝶綴二冊の寫本にして、外題に古今和歌集の五字を存し、保元二年の奥書と署名とを有す。尙最後に尊圓法親王の奥書を加ふ。本書は傳へて清輔の自筆にかかるものなりと稱せらる。紙質書體等より推せば、他に確實なる反證の

二
擧らざるかぎり、しばらく其傳の誤らざるを認むべきなり。若し又然らずとするも諸傳本中最も古きものたるや疑なからん。是實に學界稀に見る貴重なる參考資料と云ふべし。

本書は専ら原本の面目を忠實に傳ふることに努め、みだりに私意を加へず、字詰、字數、行數、丁數等悉く原本の體裁に従へり。朱書の部分は特にゴシツク活字又は太線を用ひ、墨書の部分と明かに區別せり。これその箇所が新院御本によりて校合せられたるものにして、清輔本中甚だ重要な部分なればなり。但し頭註及び脚註の細部に至りては、未だ悉く原本の體裁に従ふことを得ざる事情あるを以て、止むを得ず任意之を組み入るるに止めたり。

本書の原本は、往時或は浸水の厄に遭へりしにやとの疑なきにあらざれども、虫損きはめて少く、おほむね完全に古色を傳へたり。ただ第一冊百七丁目本にて二「こゝろあてにをらはやあらん」の次句「はつしもの」より「秋をおきて時一六頁

こそありけれさくの花うつ」まで一葉、同じく百十二丁目本にて「二條のささきの云々」「そせい」の次「もみちはの」より「かみなひのみむろの山を秋ゆけはにしさたちさる」まで一葉、同じく百三十丁目本にて「ほりかはの云々」「在原ゆきひら朝臣」の次「さくらはな」より「藤原三善か六」まで二葉、第二冊、八十一丁目本にて「たれをかも云々」の次「わたつ海の」より「君をおもひ」の作者の名「藤原忠房」まで一葉、同じく九十六丁目本にて「ありはてぬ云々」の次の詞書「みこのみやのたちはきに」より「ひさかたの云々」の作者の名「伊勢」の前まで一葉の缺脱あるは惜むべし。

今本書に如上の缺脱を補へるは、醫學博士土肥慶藏氏秘藏にかかる古寫本の本文によれるなり。土肥家本は、前田家本に比して書寫の年代下れども、全く同一系統の寫本にして、完全に原本の面影を保存せり。今兩書相照して古書の眞面目に接するを得るは、學界の慶事といふべし。

古今和歌集には異本の現存するもの少からず。普通行はるるものは、藤原定家の修訂にかゝる貞應、嘉祿の二本なり。しかるに定家以前の完全なる面目を止め、その系統を明示するものにして、最も重要なるは、清輔本なること言を俟たず。今この貴重なる古寫本を活字版として、廣く學者閲讀の便に備ふるを得たるは、本財團のひそかに欣幸とする所なり。

昭和三年九月

育 德 財 團

此集可用や
真名序
次予有祈
所見也
の、とれ、さ、も、る、る、れ、果
な、ふ、し、の、中、に、あ、ら、ん、人
こ、し、わ、さ、い、ふ、を、さ、し、も、る、る
れ、さ、い、ん、し、た、ふ、さ、し、も、る、る



周固末
藏書國

本云

以貫之自筆本書寫古今也
件本ハ於皇太后宮燒失畢云々
和哥等不似餘本其說頗違矣

通宗

此集可用眞名
序歟予有所
見也

やまとうたは人の心
をたねとしてよろつ
のことはとそなれり
けるよの中にある人
ことわさしけきものな
れはこゝろにおもふことを

みるものきくものにつ

けていひいたせるなり

花になくうくひすみつ

にすむかはつのこゑをき

けはいきとしいけるもの

いつれかうたをよまさり

けるちからおもいれすし

てあめつちをうこかし

めにみえぬお鬼にか神みをも

あはれとおもはせおとこ

おむウなのなかおもやはらけ

たけきものふのころを

あまのうきは
しのしたにて
めかみをかみ
となりたまへ
ることをいへ
るうた也

もなくさむるはうたなり

このうたあめつちのひら

けはしまりける時よりい

てきにけり。しかあれとも

よにつたはれる事は

ひさかたのあめにしては

したてるひめ
はあめわかみ
このめなりせ
うとのかみの
かたちをかた
にうつりてか
かやくをよめ
るえひすうた
なるへしこれ
らはもしのか
すもさたまら
すうたのやう
にもあらぬこ
とゝもなり

したてるひめにはしまり。

あらかねのつちにしては

すさのをのみことより

そおこりけるちはやふる

かみよには哥はもしも

さたまらすゝなほにて

事のこゝろわきかたか

りけらし人のよとな

りてよりそすさのを

のみことよりそみそもし

あまりひともしはよみ

ける。かくてそはなをめて

如古語拾遺并
日本皇代記者
開闢之初伊弉
諾伊弉册二神
共爲夫婦生大
八州國及山川
草木次生日神
最後生素淺烏

すさのをのみ
ことはあまて
るおほむかみ
のこのかみな
りおんたとす
みたまはんと
ていつもものく

神云々而以素
淺烏稱兄如何
少有不審
本ニハ有下
檢物

とりをうらやみかすみを

あはれひつゆをかなしふ

こゝろことはおほくさまく

になりにけるとほきとこ

ろもいてたつあしもと

よりはしまりて年月を

やくもたつ
つもやへかき
つまこめにや
へかきつくる
そのやへかき
を

にみやつ
りしたまふと
きにそのとこ
ろにやいろの
くものたつを
みてよみたま
へるなり

わたりたかき山もふも
 とのちりひちよりなりて
 あま雲たなひくまてお
 ひのほれることくにこの
 うたもかくのことくなるへし
 なにはつのうたはみか

おほさきのみかとのな
 はつにみこ
 ときこえける
 時東宮をたか
 ひにゆつりて
 くらひにつき
 たまはてみと
 せになりにつ
 れはわうにと
 いふ人のいふ
 かりおもひて
 よみてたてま
 つりけるうた
 なりこのはな
 はむめのはな
 をいふなるへ
 し

とのおほんはしめなり。
 あさか山のことはうねめの
 たはふれよりよみて。こ
 のふた^{うたはウタ}。哥はちゝはゝの
 やうにてそてなら^{ナラ}ふ人の
 はしめにもしけるそもく

かつらきのお
 ほきみみち
 のをくへつか
 はしたりける
 にくにのつか
 さことをろそ
 かなりとてま
 うけなとした
 りけれとすき
 ましかりけれ
 はうねめなり
 けるおうなの
 かはらけとり
 てよめるなり
 これにそおほ

う た の さ ま む つ な り
 か ら の う た も か く そ あ る
 へ き そ の む く さ の ひ と
 つ に は そ へ う た お ほ さ
 さ き の み か と を そ へ た
 て ま つ れ る う た

きみのこゝろ
 とけにける
 此葛城大君大
 臣橋卿也後賜
 橋姓見萬葉集

一曰風
 考別紙

な に は つ に さ く や
 こ の は な 冬 こ も り 今 は
 は る へ と さ く や こ の 花

と い へ る な る へ し

ふ た つ に は か そ^ス へ う た

さ く は な に お も ひ つ

く み の あ ち き な さ

二曰賦
 考別紙
 此哥在拾遺集
 物名ツクミヲ
 志賀黒主云々

みにいたつきのいる
もしらすて

といへるなるへし

みつにはなそ^スらへうた

きみにけさあした

のしものおきてい

なはこひしきことに

これはたゞこ
とにいひても
のいたとへな
ともせぬ事な
りこのうたい
かにいへるに
かあらんその
こゝろえかた
しいつゝにた
ゝ事うたとい
へるなむこれ
にはかなふへ
き

三日比

四日興

きえやわたらむ

といへるなるへし

よつにはたとへうた

わかこひはよむともつ

きしありそうみのは

まのまさこはよみつくす

とも

といへるなるへし

これはものに
なすらへてそ
れかやうにな
むあるとやう
にいふなりこ
のうたよくか
なへりともみ
えす
たらちめのお
やのかふこの
まゆこもりい
ふせくもある
かいもにあは
すてかやうな
るやこれには
かなふへから
ん
これはよろつ
のくききとり
けた物につけ
てこゝろをみ
するなりこの
うたはかくれ
たるところな

五日雅

いつゝにはたゝことうた

一六

此哥在戀
第四

いつはりのなきよなり

せはいかはかり人のこと

のはうれしからまし

といへるなるへし

むつにはいはひうた

在催馬樂

このとはむへもとひけり

むなきされと
はしめのそへ
うたとをなし
やうなれはす
こしさまをか
へたるなるへ
し
すまのあまの
しほやくけふ
りいたみおも
はぬかたにた
なひきにけり
このうたかな
ふへからん
これはことの
はとゝのほり
たゝしきをい
ふなりこのう
たのこゝろさ
らにかなはず
とめうたとや
いふへからん
山さくらあく

此殿
別紙

さき草のみつはよつ

はにとのつくりせけり

といへることのたくひなる

へしいまのよの中いろに

つき人のこゝろはなにな

りにけるよりあたなるうた

まていろをみ
つるかな花ち
るへくも風ふ
かぬよに
これはよをほ
めてかみにつ
くるなりこの
うたいはひら
たとはみえず
なむある
かすかのにわ
かなつみつゝ
よろつよをい
はふこゝろは
かみやしるら
んこれらやす
こしかなふへ
からんおほよ
そむくきにわ
かれんことは
えあるましき
ことにはなん

一七

はかなきことのみいてく
 れはいろこのみのいへにのみ
 むもれきの人しれぬことゝ
 なりてまめなるところには
 はなすゝきほにいたす
 へこときことにもあらすなりに

凡云上古帝也

たりそのはしめをおも
 へはかゝるへくなんあらぬ
 いにしへのよゝのかみかと
 春の花のあした秋の
 月のよことにさふらふ
 人々をめしてことに

つけつゝ、哥をたてまつ
 らしめたまふあるは
 花をそふとてたよなきり。と
 ころにまとひあるは月
 をおもふとてしるへな
 きやみにたとれる心くを

みたまひてさかしく
 おろかなりとしろしめし
 けむしかあるのみにあらす
 さゝれいしにたとへつく
 は山にかけてきみをね
 かひよろこひみにすき

たのしひこゝろにあまり
ふしのけふりによそへて
人をこひまつむしのね
にともをしひたかさこ
すみのへのまつもあひをひ
のやうにおほえおとこ山

のむかしをおもひいてゝ
をみなへしのひとゝきを
くねるにも哥をいひてそ
なくさめける又春のあ
したにはなのちるを
みあきのゆふくれにこ

のはのおつるをきゝある
はとしことにかゝみのかけ
にみゆるゆきとなみとを
なけきくさのつゆみつ
のあは。^トをみてわかみを
おとろきあるはきのふは

さかへおこりてときを
うしなひよにわ^{あひ}ひ^敷し
たしかりしもうとく
なりあるはまつ山のな
みをかけ野中のしみ
つをくみあきはきの

したはをなかめあか月
 のしきのはねかきを
 かそへあるはくれたけの
 うきふしを人にいひ
 よしのかはをひきてよ
 のなかをうらみきつる

此奈良ト云ハ
 聖武天皇也
 此御時獻諸歌
 由見皇代記又
 或物云猿澤池

にいまはふしの山もけふり
 たゝすなりなからのはし
 もつくるなりときく人は
 うた^歌にのみそこゝろをは
 なくさめけるいにしへより
 かくつたはるうちにならの

投身タル采女
 ハ阿女帝御時
 也其時有人丸
 云々隨大和語
 二件猿澤哥稱
 奈良帝哥又所
 入此集ノ龍田
 河哥稱同奈良
 帝哥此兩歌返
 歌又人丸哥也
 以聖武號阿女
 帝見皇代記所
 謂號天璽國押
 開豐櫻彦天皇
 又御平城宮故
 號奈良也
 又以天智天皇
 稱阿女帝號天
 命開別天皇之
 故也

御
 お
 ほん
 時
 より
 そ
 び
 ろ

ま
 り
 け
 る
 か
 の
 お
 ほん
 よ

や
 う
 た
 の
 こ
 ろ
 を
 し
 ろ

し
 め
 し
 た
 り
 け
 む
 か
 の

御
 時
 に
 お
 ほ
 き
 み
 つ
 の
 く

ら
 め
 か
 き
 の
 も
 と
 の
 人

人丸
 從持統御時至
 聖武御時丁于
 五代之間祇候

ま
 ろ
 な
 む
 う
 た
 の
 ひ
 し
 り
 な
 り
 け
 る
 こ
 れ
 は
 き
 み

も
 人
 も
 み
 を
 あ
 は
 せ
 た
 り

と
 い
 ふ
 な
 る
 へ
 し
 秋
 の
 ゆ
 ふ

へ
 た
 つ
 た
 か
 は
 に
 な
 か
 る

も
 み
 ち
 は
 み
 か
 と
 の
 御
 め
 に

之由見萬葉集
 此以前以後ハ
 不詳亦人又同
 時由見也

にしきとみえ春のあ

三〇

したよしの山のさくら

は人まろかめに雲かと

そおほえける又山のへの

あか人といふひとありけり

うたにあやしう^クたへなり

けり人まろはあか人か

かみにたゝむことかたく

あか人はひとまろかし

もにたゝむことかたくなん

ありける。この人々おゝきて

又すくられたる人もく

ならのみか
との御うた
たつたかはも
みちみたれて
なかるめりわ
たらはにしき
なかやたえな
ん
人丸
むめの花そ
れともみえず
ひさかたのあ
まきるゆきの
なへてふれゝ
は

三一

れたけのよにきこえ
 かたいとのよりくいたえ
 かたくなむありけるかゝり
 けるさきの哥をあはせて
 なむ万えふしうとなつけ
 られたりけるこゝにいにし

聖武讓位後撰
之歟

ほのくにあ
 かのうらの
 あさきりにし
 まかくれゆく
 ふねをしそお
 もふ
 赤人
 はるのゝにす
 みれつみにと
 こしわれその
 をなつかしみ
 ひとよねにけ
 る
 わかのうらに
 しほみちくれ
 はかたをなみ
 あしへをさし
 てたつなきわ
 たる

孝謙十年廢帝
 六々
 稱徳五々
 光仁十二々
 桓武年廿四々
 平城四々
 嵯峨十四々
 淳和十々
 仁明十七々
 文徳八々
 清和十八々
 陽成八々
 光孝三々
 宇多十々

へのことをもうたのこゝろ
 をもしれる人わつかにひ
 とりふたりなりこれかれ
 えたるところえぬところ
 たかひになむあるかのと
 しよりこのかたとしは

徒孝謙初年至
于寛平終百册
九年也十四代
也雖然物數上
滿云々
仍取十代哥餘
歟

もゝとせあまりよはとつ
きになんなりにけるいに
しへのことをもうたを
もしれる人よむ^人おほから
すいまこのことをいふに
つかさくらゐたかきを

はたやすきやうなれは
いれすそのほかにちかき
よにそのなきこえたる
人はすなはちへせうは
哥のこゝろはえたれとも
まことすくなしたとへは

あさみとりいとよりかけてしらす露をたまにもぬける春のやなきかはちすはのこりにしまぬこゝろもてなにかは露を玉とあさむくさかのにてむまよりをちてよめるなにめてゝをれるはかりそをみなへしわれおちにきと人にかたるな

ゑにかけるおむなをおもひていたつらにこゝろをうこかすかことし。在原のなりひらそのこゝろあまりてこと はたらすしほめるはなのいろなくて

月やあらぬ春やむかしのはるならぬわかみひとつはもとのみにしておほかたは月をもめてしこれは人のをいとなるものねぬるよのゆめをはかなみまろめはいやはかなにもなりまさるかな

孫姫式云
基泉法師哥云
このまよりみゆるはたにのほたるかもしるにあまのうみへゆくかも

にほひのこれるかことし
ふんやのやすひてはこ
とは、たくみにてそのさ
まみにおはすいは、あき
人のよき、ぬきたらんか
ことし。へさふかきかすみのたに、かけかくしてゐのくれしけふにやはあらぬ

宇治山撰喜法
師哥云
わかいはは
みやこのた
つみしかそ
すむ：
如此者基泉撰
喜各別人歟

うち勢のキそうキきせキはこと

はかすかにしてはしめ

をはりたしかならずい

は、あきの月をみるに

あか月の雲にあへるか

ことしよめるうたおほく

きこえねはかれこれを

かよはしてよくしらす。

おのゝこまちはいにし

へのそとほりひめのりう

なりあはれなるやうにて

わかいははみやこのたつみしかそすむよをうち山と人はいふなり

つよからすいはゝよき
 をむ^ウな^ウのなやめると
 ころあるにゝたりつよか
 らぬはをう^ウな^ウのうたな
 れはなるへし。おほとんの
 くろぬしはそのさま

おもひつゝぬ
 れはや人のみ
 えつらんゆめ
 としりせはさ
 めさらましを
 いろみえてう
 つるふものは
 世中の人のこ

おもひいてゝ
 こひしき時は
 はつかりのな
 きてわたると
 人はしらすや
 かゝみ山いさ
 たちよりてみ
 てゆかんとし
 へぬるみはを
 いやしぬると
 己上朱合點注
 ハ序本注也或
 人云四條大納
 言注云々通俊
 卿古今ニ其由

いやしいはゝたきゝおへる
 山人のはな^ウのかけにや
 すめるかことし。このほか
 の人々そのなきこゆる
 のへにおふるかつらのはひゝ
 ろこりはやしにしけき

ゝろの花にそ
 ありける
 わひぬれはみ
 をうき草のね
 をたえてこそ
 ふみつあらは
 いなんとそお
 もふ
 そとほりひめ
 の哥
 わかせこかく
 へきよひなり
 さゝかにのく
 ものふるまひ
 かねてしるし
 も

被記付云々但
不得心事有少
と不被信受之

このはのこくとくに
おほけれとうたとのみ
おもひてそのさまし
らす^ぬなるへしか
ゝるにいますへら
きみのあめのした
をしろしめすこと
よつの月^{トキ}こゝ
の

即位以來昌泰
三年延喜五年
并八年也而代
延喜帝寛平九
年ニ受禪仍稱
九廻以讓位年

普通ハ四時
コ、のかへり
とあり

かへりになむなりぬ^るあまね
き^{オホム}御うつくしみのなみ
やしまのほかまてなかれ

付先帝付新帝
有議是以寛平
九年付先帝也
新帝不行除目
之故云々但近
代一向付新帝
歟

ひろき御めくみのかけつ
くはやまのふもとより
しけくおまし^くてよろ

つ の ま つ り こ と を き こ し
め す い と ま も ろ く の こ と を
す て た ま は ぬ あ ま り に
い に し へ の こ と を も わ す
れ し ふ り に し こ と を
お こ し た ま ふ と て い ま も

みそなはしのちのよにも

つたはれとて延喜五年

四月十八日に大内きゝの

ともりのり御書のところの

あつかりきのつらゆきさき

のかひの目凡オフシかうちのみ

貫之集云延喜御時
やまとうたし
れる人々いま
むかしの哥を
たてまつらし
めたまて承香
殿のひんかし
なるところに
てえらほしめ
たまふはしめ
のひよぶくる
まてとかくい
ふあひたに御
前のむめの木
にほとゝきす
のなくを四月
六日のよなり
けれはめつら
しかりたまひ
てめしいたし
てうたよませ
給にたてまつ

つね衛門のふさうみ
 ふのたゝみねらにお
 ほせられて万葉集に
 いらぬうたともふるき
 みつからのをもたてまつ
 らせたまひてそれか中に

萬葉集哥問々
 入之若失歟將
 不耐優美竊以
 入之歟新撰集
 二ハ弘仁以後
 延長以往哥ヲ
 撰由雖序書以
 往以後哥多以
 入之若又未讀
 解歌ヲ見出他
 書入之歟

ることなつは
 いかゝなきけ
 んほとゝきす
 このくれはか
 りあやしきは
 なし假名眞名
 序皆稱十八日
 貫之集失歟抑
 如此序ハ四月
 十八日始以奉
 詔日也如眞名
 序ハ十八日臣
 貫之謹序トあ
 り已奏覽了日
 也如何如仲實
 所撰目錄五年
 四月日撰畢由
 所存也雖然後
 年多以入之猶
 奉詔日歟於奏
 覽日ハ不注歟
 撰所内御書所
 歟
 重案之三人々

ニ召古哥事ハ
 以前也不注之
 各所進之哥を
 合テ令撰ル初
 日四月十八日
 ニて有歟貫之
 集詞叶此議歟

むめをかさすよりはしめ
 てほとゝきずをきゝもみ
 ちをおりゆきをみるにいた
 るまで又つるかめにつけて
 きみをおもひとんをいはひ
 あきはき夏くさをみて

凡歌千百首也
而ちうた廿卷
之條不審如此

つまをこひあふさかにい
たりてたむけをいのりあ
るは春夏秋冬とも
いはぬくさくの哥をなむ
えらはせたまひけるすへ
てちうたはたまきなつ

事必も不稱定
數賦付筆書歟
但或説云貫之
自歌ヲ不入撰
上千首而後貫
之哥九十九首
ヲ依勅點追入
之云々如目錄
千九十九首也

けて古今和歌集といふか
く。のたひあつめえらはれて
山した水のたえすはま
のまさこのおほくつもり
ぬれはいまはあすかゝはのせに
なるうらみもきこえす

さゝれいしのいはほとなる
 よろこひのみそあるへき
 それまくらことはに春の
 はなにほひすくなくして
 むなしきなのみ秋のよ
 のなかきをかこ^クてれは

かつは人のみゝにおそり
 かつはうたのこゝろにはち
 おもへとたなひく雲のた
 ちゐなくしかのおきふし
 はつらゆきらかこのよに
 おなしくむまれてこのことの

ときにあへるをなむよ
ろこひぬる人丸なくなり
たれとうたのことゝまれる
かなたとひとときうつり
ことさりたのしひかな
しひゆきかふとんこの

うたのもしあるおやあ
をやきのいとたえすまつ
のはのちりうせすして
まさきのかつらなかくつた
はりとりのおとひさしく
とゝまれらはうたのさ

まをしりことこのころを

えたらん人はおほそら

の月をみるかことくにい

にしへをあふきてい

まをこひさらめかも

歌六十八首
此中返歌一

古今和歌集卷第一 春歌上

五六

ふるとしに春の立けるに

よめる

在原のもとかた

元方
棟梁男入歌
十四首國經大
納言爲猶子後
變改云々

合點

としのうちにはるはきに

新撰集歌也

けりひと、せをこそとや

いはむことしとやいはむ

はるのたちけるひよめる

きのつらゆき

九十七首于時
御書所預後爲
從五位上木工
權頭童名號内
教坊阿子久曾
其中短哥一首
旋頭哥一首

そてひちてむすひし水

のこほれるを春たつけふの

かせやとくらん

たいしらす
よみ人しらす

はるかすみたてるやいつこ

考別紙
本文也
貫之哥正本九
十七首而御本
ハ忠峯哥一首
貫之哥也相加
件哥八九十八
首如目錄
賀部貫之三首
也而如此本一
首也若定國賀
屏風哥中貫之
哥有二首歟

五七

然者九十九首
也
除忠峯之外也

みよしのゝよしのゝ山にゆき
けふりつゝ

二條のきさきのはるの

はしめの御うた

ゆきのうちにはるはきに

けりうくひすのこほれる

なみたいまやとくらん

別紙

于時前皇太后
六十四
諱高子一首清
和女御陽成院
母后贈太政大
臣藤原長良女
母紀伊守從五
上上總繼女此
后爲五節舞姬
云々
延木十一年三
月薨

催馬樂梅枝哥
也
別紙

たいしらす
よみ人しらす

むめかえにきゐるうくひす

春かけてなけとんいままたゆ

きはふりつゝ

ゆきのきにふりかりかゝれ

るをよめる
そせいほうし

春たては花とやみえんしら

卅五首
左少將良峯宗
貞二男由性僧
都弟寛平法皇

伊勢大市自筆
本ニハ花とや
みらん

ゆきのかゝれるえたにうくひ
すのなく

たいしらす よみ人しらす

別紙
前太政大臣并
黒主等或所見
作者也或所著
注是雖口傳聞
之不知定説哥
歟

こゝろさしふかくそめてし
をりければきえあへぬゆ
きのはなとみゆるか

ある人のいはくさき

遊覽宮瀧之時
依住良因院賜
良因朝臣號彼
寺遍照建立云
々

のおほきおほいまう
ちきみのうたなり

二條のきさきのとう

宮のみやす^ムところと

まうしける時に正

月三日おまへにめして

おほせことあるあひ

たにひはてりなから

ゆきのかしらにふり

かゝりけるをよませたま

ける
ふむやのやすひて

はるのひのひかりにあ

今三首如此本
相康有秀

三
六首

目錄云文屋
康秀

たるはなゝれとかしらの

ゆきとなるそわひしき

ゆきのふりけるをよめる

つらゆき

かすみたちこのめも春の

ゆきふれははなゝきさとも

元慶三年任縫
殿助

はなそちりける

六四

はるのはしめによる

藤原のことなほ

別紙

春やときはなやおそきと

きゝわかんうくひすたに

もなかすもあるかな

はるのはしめのうた

みふのたゝみね

卅四首其中短歌一首

一首
日六云言直昌
泰三と任因幡
權椽内豎頭從
五下安絶男

大和物語云
泉大將左大臣

殿へよいたう
ふけておはし
けりをとゝい
つくへおはし
ましつるたよ
りになたとき
こえたらひけ
るに壬生忠峯
御ともにおり
けるみはしの
もとなからひ
さまつきてま
うすかさゝき
のわたせるは
しのしものう
ゑをよはにふ
みわけてこと
さらにとそ
在金玉集。
然者泉大將定
國隨身歟

はるきぬと人はいへとも

うくひすのなかぬかきり

はあらしとそおもふ

斑^{子也}寛平の御時きさいのみや

の哥合のうた

源のまさすみ

山かせにとくるこほりのひま

ことにうちいつるなみや春のはつはな

六五

一首
目云當純子時
從五下小納言
後叙從上右大
臣能有五男

別紙

きのともり

六六

冊五首

はなのかをかせのたよりに
たくへてそうくひすさ
そふしるへにはやる

よみ人しらす

讀人不知哥
四百五十四首
其中短と一と
旋頭と三と但
此中著注作者
十三人

無名哥惣數目
録無相違但春
下無一首戀一
有一首加自余
部無相違

うくひすのたによりいつる
こゑなくははるくることを
たれかしらまし

在原のむねやな

はるたてとはなもにほはぬ

四首
目云棟梁從五
上筑前守昌泰
元々業平男

山さとはものうかるねにう

くひすそなく

たいしらす

よみ人しらす

のへちかくいゑる。せれはう

くひすのなくなる聲はあさなくきく

六七

此哥五文字伊勢語ニハむさ

詞云 しのはと
むかしおとこ
ありけり人の
むすめをぬす
みてむさしの
くへゐていく
ほとに。國の
トナリケレハ
かみにからめ
られにけりお
んなをはくさ
むらの中にお
きてにけりけ
りみちくる人
はこのゝはぬ
す人あるなり
とてひつけん
とす女わひて
むさしのは：
：とよみける
をきゝて女ヲ

かすかの日はなやきそ
わかくさのつまもこもれり
われもこもれり

かすかのゝとふひのゝもりいてゝ
みよいまいくかありてわかな

つみてむ

みやまにはまつのゆきたに

きえなくにみやこはのへにわかな

別紙

別紙

ハとりてとも
にゐていきけ
り

つみけり
あつさゆみをしてはるさ
めけふゝりぬあすさへふらは
わかなつみてむ

仁和のみかとのみこに

おはしましける時に人に

わかなたまひける御哥

きみかためはるのゝにいてゝ

わかなつむわかころもてに

二首

光孝天皇又號
小松帝仁明天
皇第三子母贈
皇后澤子贈太
政大臣總繼女

ゆきはふりつゝ

うたゝてまつれとおほせ

られしときよみて

たてまつれる

つらゆき

かすかのゝわかになつみにやし

ろたへのそてふりはへて

人のゆくらん

たいしらす 在原ゆき平

はるのきるかすみのころも

ぬきをうすみ山風にこそ

みたるへらなれ

寛平の御時きさいの

みやのうたあはせに

源むねゆきの朝臣

ときはなるまつのみとりも

はるくれはいまひとしほの

五首
目云行平正三位中納言民部卿按察使三品阿保親王第二子奈良天皇二世娶桓武天皇女伊豆内親王生行平等

六首
目云宗子于時從四上兵部大輔後正四上右京大夫天慶三々卒父母不注爲寛平法王御傍親之由見大和語

いろまさりけり

うたゝてまつれとおほ

せられし時によみて

たてまつりける

つらゆき

わかせこかころもはるさめ

ふるトキことへのみとりそ

いろまさりける

あをやきのいとよしかくる

ときしもそみたれてはな

のほころひにける

西大寺

にしのおほてらのほと

りのやなきをよめる

僧正へせう

あさみとりいとよしかけて

しらつゆをたまにもぬくか

はるのあをやき

たいしらす

よみ人しらす

如目六十六首
也秋上哥目六
ニハ一首也失
歟

但相加不定哥
二首十九首也
七三首俗名
十六首
宗貞入道也大
納言安世八男
寛平二年入滅
七十六
良峯宗貞藏人
頭從五上左近
少將嘉祥三々
三月廿一日天
皇崩仍同月日
出家云々

在猿丸大夫集
凡件人哥廿三
首在之
別紙

も、ちとりなくなる春は
ものことにあらたまれとん
われそふりゆく
おちこちのたつきもしらぬ
山中におほつかなくもよふ
ことりかな

卅六人々

かりのこゑをきゝて
こしへまかりける人を
おもひてよめる

五十八
但不定哥三首
有難下五十五
首也

内

凡河のみつね

如目六賀哥四
首也定國屏風
哥歟然者五十
三首也

春くれはかりかへるなりし
ら雲のみちゆきふりに
ことやつてまし

六十一首
其中短々一首
于時甲斐權少
目延木七、正
月十三日任丹
波權大目御厨
所奉後任淡路
椽

かへるかりをよめる

いせ

はるかすみたつをみす
て、ゆくかりははな、きさ
とにすみやならへる

廿二首其中短
一々

廿一首
藤繼蔭女七條
平間爲更衣父
爲伊勢守時號
伊勢



たいしらす よみ人しらす

おりつれはそてこそに
ほへむめのはなありとやこゝ
にうくひすのなく
いろよりもかこそあはれと
おもほゆれたかそてふ
れしやとのむめそも

在猿丸集詞云
まへちかき梅
花のさきたり

やとちかくむめのはな
うゑしあちきなく
まつ人のかとあやまたれけり

けるをみて
在兼輔集詞云
しのひたる人
のうつりかの
人とかむはか
りしければそ
の女に
或本には又た
ちよるばかり
ありしととか
むはかりのか
にそしみぬる
別紙
是催馬樂哥に
あをやきをか
たいとにより
てうくひすの
ぬふてふかさ
はむめの花か
さと云哥を本
哥にてよめる
なり件哥在此
集第廿部

むめのはなたちよるはかり
ありしより人のとかむる
かにそしみぬる

東三條大まうちきみ

むめのはなをりてよめる
うくひすのかさにぬふと
いふむめのはなをりてかさ
さむおいかくるやと

たいしらす

そせい

一首
目云
源常陸公天皇
第三子母飯高
氏承和七任
右大臣十四
任左大臣
今東三條本主
也

よそにのみあはれとそみ
しむめのはなあかぬいろかは
をりてなりけり

むめの花をゝりて人にを
くりける ともり

きみなくてたれにかみせん
むめのはないろをもかをも
しる人そみる

くらふ山にてよめる

つらゆき

むめのはなにほふはるへは
くらふ山やみにこゆれとしる
くそありける

月よにむめのはなを
おりてと人のいひけれ
はおるとてよめる

みつね

つきよにはみれともみえすむめ
のはなかをたつねてそしる
へかりける

はるのよのむめの花をよめる
春のよのやみはあやなしむ
めの花いろこそみえねかやは
かくるゝ

はつせにまうつるこ
とにやとりける人のいへ
にひさしうやとらてほ
とへてのちにいたれり
けれはかくさたかに
なむやとりはあると

いひいたしたりけれは
そこにたてりけるむ
めのはなをゝりてよ
める つらゆき

人はいさこゝろもしらすふ
るさとははなそむかしのか
にゝほひける

みつのほとりにむめのはな
のさけりけるをよめ ムタル

いせ

家集詞云
京極院にみか
とおはしまし
てえむせさせ
給てまいれと
あれはまいり
て池に花ちり
なんとするこ
ゝろを……
又日……

かへし季繩
さくらにはなひ
ときかりなる
ものなれはな
かれてみえず
なるにやある
らん
卅六人撰

はることになかるゝかはを
花とみてをられぬみつに
そてやぬれなん
としをへてはなのかゝみ
となる水はちりかゝるをや
くもるといふらん

いへにありけるむめの
花のちりけるをよめる

つらゆき

くるとあくとめかれぬもの
をむめのはないつのひとまに
うつろひにけむ

寛平の御時きさいのみ
やの哥合のうた

よみ人しらす

むめのかをそてにうつして
とゝめてははるはすくとも
かたみならまし

そせい

ちるとみてあるへきものを
むめのはなうたてにほひ
のそてにとまれる

たいしらす

よみ人しらす

ちりぬともかをたにのこせむ
めのはな戀しき時のおもひ
いてにせん

人のいへにうへたりけるさ
くらははなさきはしめ
たりけるをみてよめる

つらゆき

ことしよりはるしりそむる
さくらははなちるといふ事は
ならはさらなむ

たいしらす

よみ人しらす

在猿丸集
詞云
やまてらにま
かりけるにさ
くらのさきた
りけるをみて

山たかみ人もすさめぬさくら
はなものなおもひそわれ
みはやさん

又はさと、ほみ人もすさ

めぬ山さくら

山さくらわかみにくれははるか
すみみねにもをにもたちかくしつゝ

染殿后藤明子
也忠仁公女母
嵯峨天皇女源
潔姫也文徳女
御清和母后

そめとのゝきさきのお
まへにはなかめにさくら
のはなをさせるをみて
よめる

八六

染殿
清和皇后今
清和院北也

さきのおほいまうちきみ

一首
忠仁公
冬嗣公二男

としふれはよはひはお
いぬしかあれともはなをし
みれはものおもひもなし
なきさの院にてさくら
をみてよめる

ありはらのなりひらの朝臣

廿九首
藏人頭右中

在伊勢物語
在金玉集
卅六人撰

よのなかにたえてさくらの
さかさらは春のこゝろはのと
けからまし

将行平一父同
母

たいしらす

よみ人しらす

在猿丸集
詞云花みにま
かりけるに山
かはのいしに
花はなのせか
れたるをみて

いは^{シハ}ゝしるたきなくもかな
さくらはなたをりて^{モチテム}もこん
みぬ人のため

山のさくらをみてよめる

そせい

みてのみや人にかたらんさくら
はなてことにをりていへつとに
せん

卅六人撰

八七

はなのさかりに京を
 みやりてよめる
 みわたせはやなきさくらを
 こきませてみやこそはるの
 にしきなりける
 さくらははなのもとにて
 としのをいぬることをなけ
 きてよめる ともりの
 いろもかもおなしむナカラニかしに
 さくらめととしふる人そあら
 たまりける

おれるさくらをみて
 よめる つらゆき
 たれしかもとめてをりつる春
 かすみたちかくスラムらん
 山のさくらを
 うたゝてまつれとおほ
 せられしときによみて
 たてまつれる
 さくらはなさきにけらしも
 あしひきの山のかひよりみゆる
 しらくも

寛平御時きさいの宮
の哥合のうた

ともりのり

みよしの、山へにさけるさくら
花ゆきかとのみそあやまた
れける

やよひうるふ月ありけ
るとしよみける

いせ

別紙

さくらはな春くは、れる
ことトシタニモしたに人のこゝろにあ

かれやはせぬ

さくらはなのさかりに
ひさしうとはさりける
人のきたりける時に
ヨミケルよめる
よみ人しらす

伊勢語

あたなりとなにこそたてれ
さくらはなとしにまれなる
人もまちけり

かへし
なりひらの朝臣

同

けふこそすはあすはゆきとそ
ふりなましきえすはありと
はなとみましや

たいしらす

よみ人しらす

ちりぬれはこふれとしるし
なきものをけふこそさくら
おらはをりてめ
おりとらはをしけにもあるか
さくらはないさやとリシテかりて
ちるまてはみん

きのありとも

さくらしいろにころもはふかく
そめてきむはなのちり
なむのちのかたみに

二首
目云有朋本名
有友
從五位下宮内
少甫元慶四卒
若友則父歟

猿丸集
詞云
山にはなみに
まりて

金玉集
卅六人

さくらのはなのさけりけ
るをみにきたりけ
る人によみてをくり
ける みつね
わかやとのはなみかてらに
くる人はちりなむのちそ戀
しかるへき

亭子院の哥合の時に
よめる いせ

みる人もなき山さとのさ
くらはなほかのちりなむ

集云哥合時

寛平法皇御亭
子院之時哥合
也
延木十三年但
無件哥合不入
哥歟

件院ハ
七條坊門南油
小路東一町也

のちそさかまし

古今和歌集卷第二 春和哥下

たいしらす よみ人しらす

歌六十六首其
外他本哥二首
勘入之
已上貫之哥
此部如目六
無名哥十七首
而十八首也
躬恒歌六首也
而七首若一首
ハ無名

はるかすみたなひく山の
さくらはなうつろはん
とやいろかはりゆく
まてといふにちらてしとまる
ものならはなにをさくらに

おもひまさまし
のこりなくちるそめて
たきさくらはなありキ
てよの中はてのうけれは
このさとにたひねしぬへ
しさくらはなちりのまか
ひにいへちわすれて
うつせみのよにもにたるか
はなさくらさくとみし
まにかつちりにけり

僧正遍照によみておくりける

これたかのみこ

名

二首
目云惟喬親王
號小野宮
文德天皇第一
王子母從四上
紀靜子正四下
虎女也

さくらはなちらはちら
なむちらすとてふる里
人のきてもみなくに

雲林院にてさくらの

ちりけるをみてよめる

そうくほうし

三首
目云承均元慶
之比人

消難也きえか
ぬるなり

さくらはちるはなのところは
春なからゆきそふりつゝ
きえかてにする

さくらの花のちりけるを

みてよみける

そせいほうし

花ちらす風のやとりはた
れかしるわれにをしへよ
ゆきてうらみん

雲林院にてさくらの
はなをよめる

在素性集
普通はひとさ
かり

そうくほうし

いさゝくらわれもちりなん
いとさかりありなは人に
うきめみえなん

あひしりて侍ける人
のまうてきてかへりに
けるのちによみてはなに

さしてつかはしける

つらゆき

ひとめみしきみもやくると
さくらはなけふはま
ちみてちらはちらなん
山さくらをみてよめる

きよはらのふかやふ

はるかすみなにかくす
らむさくらはなちるまを

但誹諧中相加
不定歌一首十
七首
于時藏人所雜
色後從五下諸
司筑前介海雄
孫豊前介房則
男

たにもみるへきものを
 こゝちそこなひてわ
 つらひはへりける時に
 かせにあたらしとて
 おろしこめてのみは
 へりけるあひたにを
 れるさくらのちりか
 たになりたるを
 みてよめる

或本にまへの
 さくら

ふちはらのよるかの朝臣

三首
 目云因香尙侍
 従四下貞観寛
 平人

たれこめてはるのゆくへも
 しらぬまにまちしさくら
 もうつろひにけり
 さくらのやりみつにちり
 けるを
 貫之

見合或本有此
 哥
 此歌無御本

ゆくみつにかせのふきいるゝ
 さくらはなきえすなかるゝ
 ゆきかとそみる

雅院
或御曹子傍也
孝坊也中御門
北壬生東云々

とうくの雅院にて
さくらのはなのみかは
みつにちりてなかれ
けるをみてよめる

すかのたかよ

一首
目云菅野高世

えたよりもあたにちり
にしはなれはおちても
みつのあはとこそなれ
さくらのとくちりはへり

けるをみてよみける

つらゆき

ことならはさかさやあらぬ
さくらはなみるわれさへに
しつこゝろなし

雲林院にまかりて
さくらのちりける
によめる

或本有此哥
無御本

ゆきとみてぬれもやすると
さくらはなちるにたもとを
かつきつるかな

さくらのことくちる物
はなしと人のいひ
ければよめる

さくらはなとくちりぬ
ともおもほえす人の心

雲林院ニマカ
リテサクラノ
チリケルヲヨ
メル
ユキトミテヌ
レモヤスルト
サクラハナチ
ルニタモトヲ
カツキツルカ
ナ

そかせもふきあへぬ

さくらはなのちる
をよめる
みつね

*^oゆきと^{のみ}たにふるたにあ

るをさくらはないかにち
れとか風の吹覽

さくらはなのちる
をよめる

ひさかたのひかりのとけき
春のひにしつ心なくはな
のちる覽

東宮のたちはきの
ちにてさくらのはな
のちるをよめる

ふちはらのよし風

一首
目云良風

此哥在興風集
但良風爲帶刀
詞相叶若彼集
失歟

はるかせは花のあたり
をよきてふけこゝろつ
からやうつろふとみむ

于時左衛門大
尉後從五下任
出羽國介散位
正野男

御本次第如此
◎*

ひえにのほりて花
をみてかへりまう
てきてよめりける

つらゆき

山たかみゝつゝわかこしさく
らはな風は心にまかすへらなり

みるにをくり
けるなにせん
につたのみる
めを思けむお
きつたまもを
かつくみにし
て然者黒主陰
陽師歟

別紙

黒主寛平法皇
幸石山之時近
江守打出演
御儲所居黒主
之由見大和物
語黒主園城寺
本主歟彼縁記
云大伴黒主村
主等以氏寺申
智證大師寄天
台末寺是爲免
國役云々此哥
如彼哥合貫之
歌也又黒主非
件哥合作者又
彼哥合延木十
一年四月十八
日也如何如御
本以第八當貫
之哥歟

一〇八
くろぬし

はるさめのふるはなみた
そさくらはなちるをし
まぬ人しなければ
ていしの院の哥合の哥
さくらはなちりぬる風のな
こりにはみつなきそらに
なみそ立ける

ならのみかとの御うた

三首
目云大伴黒主
貞觀之比人又
讀延木大嘗會
歟
後撰云しかの
からさきには
らへしける人
のもとにみる
といふものあ
りけり黒主そ
こにきあひて
かのみるにこ
ゝろをかけて
たはふれけり
はらへはてゝ
車よりくろぬ
しにかつけも
のせり黒主そ
のものこしに
かきて
一首
平城帝也
目云

ふるさとゝなりにしな
らのみやこにもいろかはら
すははなそさきける
はるのうたとて
よめる

桓武天皇長子
母皇后藤乙牟
漏贈太政大臣
良繼女

よしみねのむねさた

遍照俗名也
三首

はなのいろはかすみにこ
めてみせすともかをたに
をぬすめ
くればるの山風

寛平御時きさいの宮
の哥合のうた

そせい

はなのきもいまはほりうゑ
し春立はうつろふいろ
お人ならひけり

たいしらす
よみ人しらす

はるのいろのいたりいたらぬ
さとはあらしさけるさ
かさるはなのみゆらん

春のうたとてよめる

つらゆき

みわ山をしかもかくすか春
かすみ人にしられぬはな
やさくらん

雲林院
親王常康仁明
天皇第七子

雲林院のみこのもと
にはなみにきた山
のほとりにまかれり
けるときによめる

別紙

いさけふははるの山へにま
ひなむくれなはなけのは
なのかけかは
はるのうたとてよめる
いつまでかのへにこゝろのあ
くかれむはなしちらすは
としもへぬへし

たいしらす

よみ人しらす

在素性集

はることには花のさかりは
ありなめとあひみんことは
いのちなりけり
はなのことよのつねならはす
くしてし昔はまたもかへり
きなまし
吹風にあとつらへつくるもの
ならはこのひともとはよき
よといはまし

まつひともしぬものゆゑに
うくひすのなきつる
はなを、りてけるかな

寛平御時きさいのみ
やのうた合のうた

ふちはらのおきかせ

サクラハナ

さくはなはちくさなから
にあたなれとたれかははるを
うらみはてたる

十七首
目云興風
延木十四任
下總權大掾號
院藤太參議濱
成孫道成男

はるかすみいろのちくさに
みえつるはたなひく山の
はなのかけかも

ありはらのもとかた

かすみたつはるの山へはとほ
けれど吹くるかせははな
のかそする

うつろへるはなをみて

よめる

みつね

はなみれはこゝろさへにそ
うつりけるいろにはいて
し人もこそしれ

たいしらす

よみ人しらす

うくひすの鳴のへことに
きてみれはうつろふ花
にかせそふきける
ふく風をなきてうら
みようくひすはわれやは

はなにてたにふれたる

治子朝臣

一首
目云春澄朝臣
治子延木二
從三位
參議春澄善繩
女

ちるはなのなくにしとまる
ものならはわれうくひす
におとらましやは

仁和の中將のみやすと
ころのいへに哥合せん
としける時ヨメルよみける

はなのちることやわひしき

○フチハラノノ
チカケ

一首
目云後蔭于時
從五位下左馬
頭後備前權介
中納言有穂二
男母備後介安
倍興氏女

春かすみたつたの山の
うくひすのこゑ

うくひすのなくをよめる

そせい

こつたへはおのかはふき
にちるはなをたれにおほ
せてこゝらなくらん

うくひすのはなのき
にてなくをよめる

みつね

しるしなきねをもなく
かなうくひすのことしのみ
ちるはなゝらなくに

たいしらす
よみ人しらす

駒雙也

こまななめていさみにゆかむ
ふるさとはゆきとのみこそ
はなはちるらめ

ちるはなをなにかうらみ
むよの中にわかみも人トモニもあ
らむものかは

をのゝこまち

十七首
出羽國郡司女

卅六人々

はなのいろはうつりにけ
りないたつらにわかみよにふる
なかめせしまに

仁和の中將みやす所

のいへに哥合せむと
しける時によめる

そせい

在集也

をしとおもふこゝろもいとに
よられなむちるはなことに
ぬきてとゝめむ

しかの山こえに女のお
ほくあへりけるによみ
てつかはしける

あつさゆみはるの山へをこ
えくれはみちもさりあへす
花そちりける

寛平御時きさいの宮の
哥合のうた

はるのゝにわかなつまむと
こしものをちりかふはなに
みちはまとひぬ

山てらにまうてたりけ
るによめる

やとりしてはるの山へにね
たるよはゆめのうちにそ
はなもちりける

寛平御時のきさいの
宮の哥合のうた

無件哥合

吹風とたにのみつとし
なかりせは

みやまかくれの花をみ
ましや

しかよりかへりける
女どもの花山にいりて
ふちのはなのもとに
たちよりてかへりけるに
よみてをくりける

僧正へせう

よそにみてかへらむ人に

ふちのはなはひまつ
はれよえたはをるとも

いへにふちのはなの
さけりけるを人のたち
とまりてみけるをよめる

みつね

わかやとにさけるふちなみ
たちかへりすきかてにのみ

人のみるらん

たいしらす

よみ人しらす

鶯丸集詞云
山ふきの花を
みて但五文字
いろもかも又
こしまの里の

いまもかもさきにほふらん

たち花のこしまのくまの

やま吹のはな

はるのあめに、ほへるいろも

あかなくにかさへなつかし

やまふきのはな

猿丸集詞云
あめふりける
ひやへやまふ
きをりて人の
かりやるとて
よめる
又在家持集如
何

御本ニモコヨ
ヒトアリ

やまふきはあやな、さ

きそはなみむとらへけむ

きみかこ^{カイ}よひこなくに

よしのかはのつ^{ワトリ}らに

山ふきのさけりける

をよめる

つらゆき

よしのかはきしのやまふき

吹風にそこのかけさへうつ

ろひにけり

たいしらす

よみ人しらす

かはつ鳴るてのやま吹ち

りにけりはなのさかりに

あはましものを

このうたはある人のいはく

たちはなのきよともか也

はるのうたとてよめる

そせい

目云清友内舍
人贈太政大臣
也左大臣諸兄
孫奈良磨子深
草外祖父
皇太后嘉智子
父嵯峨并淳和
等後宮也

おもふとちはるの山へにうち
むれてそこともいはぬた
ひねしてしか

又はあはれといふこと

をかれいにつゝみもて

はるのとくすくるを

よめる

みつね

あつさゆみはるたちしより

としつきのいるかこときくも
おもほゆるかな

やよひにうくひすのこ

ゑのひさしうきこえ

さりけるおよめる

つらゆき

なきとむるはなしなけ

れはうくひすもはては

ものうくなりぬへらなりや

よひのつこもりかたに

山をこえけるに山かはより

はなのなかれけるをよ

める
ふかやふ

花ちれはみちのまにくとめ

くれは山にはゝるもなく

なりにけり

はるをゝしみてよめる

もとかた

別紙
貞文哥合也此
哥合哥有五首
延木五年二月
廿九日

をしめともと、まらなくに春
かすみかへるみちにし立ぬ
とおもへは

寛平御時きさいのみや
の哥合のうた

おき風

こゑたゝすなけやうくひ
すひとゝせにふたゝひと
たにくへきはるかは

やよひのつこもりのひ
なつみよりかへりける女
ともをみてよめる

みつね

とゝむへきものとはなしにはか
なくもちるはなことにた
くふこゝろか

やよひのつこもりのひ
あめのふりけるにふち

射恒集云
平仲家哥合仲
春哥也
但件哥合ニハ
暮春哥也

のはなをゝりて人につかは

しける

なりひらの朝臣

ぬれつゝそしひておりつる

としのうち春はいくかも

あらしとおもへは

ていしの院の哥合の哥

延木十一と四月十八日哥合也

みつね

けふのみとはるおゝもはぬと

きたにもたつことやすき

卅六人

はなのかけかは

古今和歌集卷第三 夏哥

たいしらす よみ人しらす

わかやとのいけのふちなみ
さきにけり山ほとゝきす
いつかきなかむ

この歌ある人のいはく

かきのもとの人丸かうた也
うつきにさけるさくらを
よめりける

七首
目云
柿本朝臣天足
彦國押人命之
後也
敏達天皇御世
依家門有柿樹
爲柿本臣氏

きのとしきた

あはれてふことをあまたに
やらしとやはるにをくれて
ひとりさくらん

四首
目云利貞從五
下阿波守元慶
五卒

たいしらす みよ人しらす

さつきまつ山ほとゝきすうち
はふきいまもなかなむこ
そのふるこゑ

猿丸集
詞云うつきの
つこもりにほ
とゝきすをま
つとてよめる

いせ

さつきこはなきもふり
なむほとゝきすまたしき
ときのことゑをきかはや

よみ人しらす

さつきまつはなたちはな
のかをかけはむかしの人の
そてのかそする
いつのまにさつきゝつらん
あしひきの山ほとゝきすい

伊勢語云む
かしをとこあ
りけりみやつ
かへいそかし
うてこゝるも
まめならさり
けるほとにい
へとうしに思
はんといふ人
につきて人々
にへいきけり
このをところ
さのつかひに
ていきけるに
ある國のしそ

まそ鳴なる
けさきなくいまたゝひなる
ほとゝきす花たちはなに
やとはからなん

をとほ山をこえける時に
ほとゝきすのなくを
きゝてよめる

きのともりの

おとは山けさこえくれはほとゝきす

うの官人のめ
にてなんある
ときゝて女あ
るしにかはら
けとらせよさ
らすはのまし
といひければ
かはらけとり
ていたしたり
けるにさかな
ゝりける花た
ちはなをとり
てつかひのよ
める
さつきまつ
といひけるに
そおもひいて
ゝあまになり
て山にいりて
そあなる

こすゑはるかにいまそ
なくなる

ほとゝきすのはしめて
なきけるをきゝてよ

める
そせい

ほとゝきすはつこゑ

きけはあさきなくぬし

さたまらぬこひせらるはた

別紙
萬葉云
こひしなはこ
ひもしねとや
ほとゝきすも
の思ときにき
なきとよます

ならのいそのかみのてら
にてほとゝきすのなくを
よめる

いそのかみふるきみやこの

ほとゝきすこゑはかりこ

そむかしなりけれ

たいしらす
よみ人しらす

夏山になくほとゝきす心

萬云
山とにはなき
てかくらんほ
とゝきすなか
なくことにな
き人おもほゆ

あらは

猿丸集詞云
あたるにける
おんなに物を
いひそめてた
のもしけなき
ことをいふほ
とにほととぎ
すのなきけれ
は

ものおもふわれにこゑな
きかせそ
ほととぎすなくこゑき
けはわかれにしふるさと
さへ^{ヒト}そこひしかりける
ほととぎすななくさと
あまたあれはなを^ヲうとま
れぬおもふものから

此時はの山の
哥或人云
むかしあひお
もひたる女時
の一人のこに
とられてこひ
しと思へとも
かひなくてと
しをふるにか
のをとこ大納
言になりてあ
るしするにこ
のものとをと
こまいりてか
の女のうみた
るわかきみの
いつとむつは
かりなるをよ
ひてゆひのさ
きをくひきり
てちこのかひ
なにかきては
とにみせたま
へといひける

おもひいつるときはの山のほ
ととぎすからくれなひの
ふりてとそ鳴
こゑはしてなみたはみえ
ぬほととぎすわかころもての
ひつをからなん
あしひきの山ほととぎす
をりはへてたれかまさると
ねをのみそなく

哥也
推之平仲敷
彼女本院北方
歟時は山の
いはつゝしの
哥作云々
然平仲敷但
難信受事也在
後撰むかしせ
しわかゝねこ
とのかなしき
はと云哥こそ
このちこのか
ひなにかきた
るうたとはし
りてはへれ

いまさらにやまへかへるなほ
とゝきすこゑのかきりは
わかやとになけ

みくにのまち

一首
目云三國町仁
明更衣貞登女

やよやまて山ほとゝきす
ことつてむわれよの中に
すみわひぬとよ

寛平御時のきさいの

みやの哥合のうた

ともりの

よやくらきみちやまとへる
ほとゝきすわかやとをし
もすきかてに鳴

五月雨にものおもひをれは
ほとゝきすよふかくな
きていつちゆくらん

大えのちさと

やとりせしはなたち花も
かれなくになとほとゝきす
こゑたえぬらん

九首
目云大江千里
延木三と轉兵
部大丞
參議音人男

きのつらゆき

なつのよのふすかとす
れはほとゝきす鳴一こゑ
にあくるしのゝめ

みふのたゝ峯

くるゝかともれはあけぬる
なつのよをあかすとやなく
やまほとゝきす

きのあきみね

なつやまに戀しき人やい
りにけむこゑふりたてゝ
なくほとゝきす

二首
目云
秋峯

よみ人しらす

こそこのなつなきふるしてし
ほとゝきすそれかあらぬか
こゑのかはらぬ

ほとゝきすのなくを
きゝてよめる

つらゆき

さみたれのそらもとゝろに

別紙
在家持集々失
歟

ほとゝきすなにをうし
とかよたゝなくらむ

さふらひにておのことも
のさけたうへけるに
めしてほとゝきすまつ
うたよめとありければよめる

みつね

ほとゝきすこゑもきこ
えすあまひこはほかになく

ねをこたへやはせぬ

やまにほとゝきすのな
きけるをきゝてよめる

つらゆき

ほとゝきす人まつ山に
なくなれはわれもうち
つけにこひまさりけり
はやくすみけるところ

にてほとゝきすのなき
けるをきゝてよめる

たゝみね

御本無名

在家集
又如目六忠峯
哥也

^{ムカ}いにしへやいまも戀しき
ほとゝきすふるさとにしも
なきてきつらん

ほとゝきすのなきける
をきゝてよめる

みつね

ほとゝきすわれとはなしに
うの花のうき世中にな
きわたるかな

はちすの露をみて
よめる

僧正へせう

はちすはのにこりにしまぬ
こゝろもてなにかはつゆを
玉とあさむく

月のおもしろかりけるよ
あかつきかたによめる

ふかやふ

夏の夜はまたよひなから
あけぬるをくものいつこに
月やとるらむ

となりよりとこなつの
はなをこひにおこせた
りけれはをしみてこの

うたをよみてやれりける

みつね

ちりをたにすゑしとそ

おもふさきしよりいもとわか

ぬるとこなつのはな

みな月のつこもりのひ

よめる

なつと秋とゆきかふそらの

かよひちに^ハかたへすゝし

き風や吹覽

歌八十首

古今和歌集卷第四 秋哥上

秋たつひよめる

藤原のとしゆき

卅六人々

あきゝぬとめにはさやか

みえねとも風のおとにそ

おとろかれぬる

十九首
目云敏行從四
上右兵衛督寛
平九年任之從
四上按察使富
土磨男母正四
下刑部卿紀名
虎女能書也夢
不愼書經論忽
遇鑿識具見自
博
紀有常妹子歟

あきのたつひうゑの
をのこともかものかはらに
かはせうようしけるとも
にまかりてよめる

きのつらゆき

かはかせのすゝしくもあるか
う^{フキ}ちよするなみとゝもにや

秋はたつ覽

たいしらす

よ^み人しらす

在家持集但
わきもこか又
あきのはつ風
云々
凡家持哥十一
首在之

わかせこかころものすそを
ふきかへしうらめつらしき
秋のかせかな

きのふこそさなへとりし
かいつのまにいなはもそよ
と秋風のふく

秋風のふきにしひよりひ
さかたのあまのかはらにたゝぬ
ひはなし

ひさかたのあまのかはらの
わたしもりきみわたりなは
かちかくしてよ

又はきみかへらはふなかく
れせよ

御本ニ橋ヲ直
テ船トカケリ

實方集云
あまのかはか
よふうきゝに
ことゝはんも
みちのはしは

あまのかはもみちをふねに
わたせはやたなはたつめの
秋をしもまつ
こひくゝてあふよはこよひ

ちるやちらす
や
若此哥を本に
てよめるか然
者猶橋といふ
へきにや彼人
僻事知哉

あまのかはきりたちわたり
あけすもあらなん

寛平御時になぬかの夜

うへにさふらふをのこと
もうたゝてまつれとお
ほせられける時に人に
かはりてよめる

ともりのり

伊勢大甬自筆
本ニハわたり
はつれば

あまのかはあさせしらなみ

たとりつゝわたりはてねは
あけそしにける

おなし御時のきさい
の宮のうたあはせの哥

藤原のおき風

在卅六人撰

ちきりけむこゝろそつらき
たなはたのとしにひとたひ
あふはあふかは
なぬかのひのよゝめる

凡かうちのみつね

在貞文哥合又
在寛平中宮哥
合不審

としことにあふとはすれと
たなはたのぬるよのかすそ
すくなかりける

別紙

たなはたにかしつるいとのうち
はへてとしのをなかくこひ
やわたらん
そせい

こよひこむ人にはあはし

たなはたのひさしきほ
とにまちもこそすれ

なぬかのよのあか月によめる

源のむねゆきの朝臣

いまはとてわかるゝときはあ
まのかはわたらぬさきに
そてそひちぬる

やうかのひよめる

にふのたゝみね

けふよりはいまこむとしの
きのふをそいつしかとのみ
まちわたるべき

たいしらす

よみ人しらす

このまよりおちたるつきのかけ
みれはこゝろつくしのあきは
きにけり
おほかたの秋くるからにわか

猿丸集詞云
あきのはしめ
つかたものお
もひけるによ
める

みこそかなしきものと思
しりぬれ

わかたぬにくる秋にしも

あらなくにむしのねきけは

まつそかなしき

ものことにあきソカナシキかなし

もみちつゝうつろひゆくを

かきりとおもへは

御本ニモ
アキコソカナ
シトアリ普通
ハアキノカナ
シキトアリ

在寛平后哥合
此哥在千里集
但件集哥三首
在後撰皆稱無
名若以古哥撰
出歟不齊

惟貞親王文徳
天皇御子讀人
不知字
疊重如何

ひとりぬるところはくさはに
あらねとも秋くるよひは
露けかりけり
これさたのみこのいへの

歌合のうた

よみ人しらす

いモつはとはときはわかねと秋のよ
そものおもふことのかきり
なりける

かむなりのつほに人くあつ
まりてあきのよをしむ
うたよみけるついでに
よめる
みつね
かくはかりをしとおもふよ
をいたつらにねてあかすらん
人さへそらき

たいしらす

よみ人しらす

朗詠集江注ニ

しらくもにはねうちかはし

菟田集伊衡詠
也云々

とふかりのかけさへみゆる
秋のよのつき

在萬葉集
小夜中也

さよ中とよはふけぬ^{ナリ}らし
かりかねのきこゆるそらにつき
わたるみゆ

これさたのみこのいへの哥合
によめる
大江千里

月みれはちゝにもこのそ
かなしけれ我身ひとつの
秋にはあらねと

たみね

ひさかたの月のかつらも秋
はなを^ほもみちすれはや
てりまさる覽

月をよめる

在原もとかた

秋のよの月のひかりしあか
けれはくらふの山もこえぬ
へらなり

人のもとにまかれりけるよ
きりくすの鳴けるをきゝて

よめる

藤原たふさ

きりくすいたくななきそ
秋のよのなかきおもひはわ
れそまされる

これさたのみこのいへの
哥合のうた

としゆきの朝臣

あきのよのあくるもしらす鳴
むしはわかことものやわひ
しかるらん

四首
目云忠房
從五下左兵衛
佐後正五下山
城守延長六々
卒大貳廣敏孫
信乃椽是嗣子

たいしらす

よみ人しらす

あきはきもいろつきぬれは
 きりくすわかぬことや
 よるはかなしき
 あきのよはつゆこそことに
 さむからしくさむらことに
 むしのわふれは
 きみしのふくさにやつるゝ
 ふるさとはまつむしのねそ

かなしかりける
 秋のゝにみちもまとひぬまつむ
 しのこゑするかたにやとや
 からまし
 秋のゝにひとまつむしのこ
 ゑすなりわれかとゆきて
 いさとふらはん
 もみちはのちりてつもれるわか
 やとにたれをまつむしこゝ
 らなく覽

猿丸集詞云
ものへいきけ
るみちにひく
らしのなきけ
るをきゝて

ひくらしのなきつるなへに
ひはくれぬとみしはやまの
かけにサありける
ひくらしのなく山さとのゆ
ふくれは風より外にとふ
人もなし

はつかりをよめる

もとかた

まつひとにあらぬものからはつ
かりのけさなくこゑのめ

つらしきかな

これさたのみこのいへの哥

合のうた とものり

秋風にはつかりかねそき

こゆなるたかたまつさを

かけてきつらん

たいしらす よみ人しらす

わかゝとにいなおほせとりの

三十六人撰

猿丸集
別紙

此哥寛平后宮
哥合也如何
別紙本文也

朗詠集江注云

なくなへにけさふくか
 せにかりはきにけり
 いとはやもなきぬるかりか
 しらつゆのいろとるき
 ももみちあへなくに
 又はあきはきのした
 はもいまたもみちあ
 へなくに

或人曰射恒有
 千年以成和覽
 于時八月也瀧
 口戸參候竹臺
 下時秋雁適鳴
 有勅命未童獻
 和歌爰唱春霞
 字人々嘲哢爰
 射恒於瀧口戸
 稱曰到佳境云
 々次讀了人々
 感今案古今爲
 他哥可召云々

はるかすみかすみていに
 しかりかねのいまそなく
 なる秋きりのうゑに
 よをささむみころもかりかね
 なくなへにはきのした
 はもいろつきにけり

この哥はある人のいは
 くかきのもとの人丸
 かなり

寛平御時きさいのみや
のうた合のうた

藤原のすかね朝臣

別紙

あきかせはこゑをほにあ
けてくるふねはあま
のとわたるかりにそありける
かりのなきけるをよめる

みつね

一首
目云菅根子時
藏人頭從四下
式部大甫春宮
亮五十一
後參議贈三位
從五上常六介
春繼孫從四下
右兵衛督良尙
一男延木八々
卒

彼歌合ニハね
さめくにし
かはなきつゝ

うきことをおもひつらねて
かりかねのなきこそわた
れ秋のよなく
これさたのみこのいへ
の哥合のうた

たみね

やまさとは秋こそことにわ
ひしけれしかの鳴ねに
めをさましつゝ

たいしらす

よみ人しらす

此哥有寛平中

宮哥合

猿丸集

但五文字あき

山の

又詞云しかの

なくをきゝて

おくやまにもみちふみわ

けなくしかのこゑきく

ときそ秋はかなしき

たいしらす

あきはきにうらひれをれは

あしひきの山したとよみ

しかのなくらん

あきはきをしからみふ

別紙

御本ニハ題不
知之字ナシ然
者惟貞哥合哥
歟

卅六人

清也

せてなくしかのめにはみえ
すておとのさやけさ

これさたのみこのいへの哥
合によめるうた

藤原のとしゆきの朝臣

秋はきのはなさきにけりた
かさこのおのへのしかはいまや
なくらん

むかしあひしりてはへり
ける人の秋のゝにあひて

ものかたりしけるついで
によめる みつね

あきはきのふるえにさけ
るはなみれはもとの心は
わすれさりけり

たいしらす よみ人しらす

あきはきのしたはいろつ
くいまよりやひとりぬる人の
いねかてにする

難寝也

なきわたるかりのなみたや
おちつらむものおもふやとの
はきのうゑのつゆ
はきのつゆたまにぬかむと
れはけぬよしみむ人はえ
たなからみよ

この哥ある人ならのみ
かとの御うたとなむ
まうす

聖武天皇也
有二首

家持集
但えたもたわ
ゝにと云々

猿丸集
詞云めのもと
にやりける
又在家持集

をりてみはおちそしぬへ
き秋はきのえたもとをゝ
にをけるしらつゆ
はきかはなちるらんおのゝ
つゆしもに^{シケミ}ふれておゆかん
さよはふくとも

如目六八秋下
哥二首稱康秀
哥三

これさたのみこのいへ
の哥合によめる

ふんやのあさやす

あきのゝにをくしらつゆは
たまなれやつらぬきかくる
くものいとすち

一首
目云文屋朝康
延木二と任大
舍人允仁和法
皇御給

たいしらす

僧正遍照

かほをよみうちみはかりそ
をみなへしわれをちに
きと人にかたるな

僧正へせうかもとにならへ

まかりけるときにおとこ
山にてをみなへしを
みてよめる

ふるのいまみち

三首
目云布瑠今道
從五下三河介
貞觀寛平人

おみなへしうしとみつゝそ
ゆきすくるおとこ山にし
たてりとおもへは

これさたのみこのいへの
うたあはせのうた

としゆき朝臣

あきのゝにやとりはすへし
をみなへしなをむつまし
みたひならなくに

たいしらす

おのゝよしき

二首
目云小野美材
從五下信乃權
守參議從三左
大辨篁孫大内
記後生男延木
二、卒

在寛平中宮哥
合
おみなへしおほかるのへにや
とりせはあやなくあたの
なをやたちなん

寛平法王女郎
花合也昌泰元
朱雀院のをみなへし
あはせによみてたて
まつりける

左のおほいまうちきみ

をみなへし秋のゝかせにうち
なひきこゝろひとつを
たれによすらん

二首
從二位左近大
將藤時平號本
院贈太政大臣
照宣公一男母
四品人康親王
女也延木九年
薨卅九

藤原のさたかたの朝臣

あきならてあふことかたき
おみなへしあまのかはらに
をいぬものゆへ

一首
于時左少將内
大臣高藤二男
母宮内大甫宮
道彌益女號三
條右大臣

後度女郎合哥也

つらゆき

後度
たかあきにあらぬものゆへ
をみなへしなといろにいてゝ
またきうつろふ

みつね

後度
つまこふるしかそなくなる
をみなへしおのかすむのゝ
はなとしらすや